図書紹介（102）

『ロンドン日本人村を作った男　謎の興行師タナカー・ブヒクロサン 1839～94』

小山 騰、藤原書店、2015

おやさと研究所研究員
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

イギリスと日本の関係は古く、1600 年にイギリス人ウィリアム・アダムス（後の三浦按針）が日本に漂着したのがその嚆矢とされる。1858 年の日英修好通商条約締結により正式な外交が開始されると、人の往来も徐々に増加していく。幕末から明治維新へと日本社会が大きく転換していく中で、欧米諸国に学ぶために多くの留学生が渡航し、イギリスへも 1860 年代に長州藩、薩摩藩そして江戸幕府から若者たちが派遣され、多くはロンドンの大学で共に学んだ。

一方、このような当時のいわゆるエリート層だけでなく、1866 年に海外渡航が自由化されると庶民の人々も海を渡るようになり、その先陣を切ったのは軽業師であった。彼らは軽業見世物に目をつけた外国人の仲介で、アメリカ、オーストラリア、またヨーロッパ諸国を訪れ、各地を転々としながら興行していった。

開国以降、諸外国との様々な交流が開始される中で、日本の美術や工芸品が紹介され、各国で関心が高まっていった。ヨーロッパではフランスを中心としてジャポニズム（日本趣味）が流行し、多くの人々が日本の絵画などの美術に興味を示し、工芸品などを買い求めた。イギリスでのジャポニズムは 1862 年のロンドン博覧会に始まったといわれる。日本でイギリス領事をつとめたラザフォード・オールコックが、この博覧会で日本の美術品を展示し人気を博したことがそのきっかけになったとされる。こうしたイギリスでの日本への関心の高まりを背景に、1885 年から 1887 年にかけて「ロンドン日本人村」という博覧会が開催された。日本茶屋、お寺などが立ち並び、職人の実演や工芸品の販売などが行われた。この催し物の特徴は実際に日本人が居住したことであり、100 人近くの日本人がロンドンへと渡っている。ロンドン在住の日本人数が当時 200 名前後であったことを考えると、現地の人々にかなりのインパクトを与えたのではないかと想像される。

今回紹介する本書『ロンドン日本人村を作った男　謎の興行師タナカー・ブヒクロサン 1839～94』は、この「ロンドン日本人村」を企画、運営したタナカー・ブヒクロサンというオランダ人についての話である。作者の小山騰（のぼる）氏は、1948 年愛知県生まれで、成城大学卒、慶応義塾大学大学院修士課程（日本史）修了の後、国立国会図書館、英国図書館などの勤務をへて、1985 年から 2015 年までケンブリッジ大学図書館で日本部長として日本語コレクションを担当した。主な著書に、『国際結婚第一号―明治人たちの雑婚事始』（講談社、1995 年）、『破天荒「明治留学生」列伝―大英帝国に学んだ人々』（講談社、1999 年）、『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真―マーケーザ号の日本旅行 2』（平凡社、2005 年）、『日本の刺青と英国王室―明治期から第一次世界大戦まで』（藤原書店、2010 年）、『ケンブリッジ大学図書館所蔵アーネスト・サトウ関連蔵書目録』（ゆまに書房、2016 年）などがある（本書及び勉誠出版 HP より）。

小山氏は、日本とイギリス両国での豊富な史料に基づいて、このブヒクロサンというオランダ人の、日本での英仏駐日公使館での通訳者、欧米での日本人軽業見世物興行師、そしてロンドンでの日本人村のプロデューサーとしての生涯を明らかにしている。

また、本書では、これまで謎とされていたロンドン日本人村を興行したタナカー・ブヒクロサンという人物を、幕末期に日本に置かれた英国とフランスの両公使館で通訳として活躍したフレデリック・ブレックマンであるとし、様々な史料を提示してその立証を試みている点も注目される。

内容は次の通り。

序章　幕末・明治期の軽業見世物興行とジャポニスム
第 I 部 駐日英・仏公使館員時代（1859-66 年）
　第一章 日本への来航と横浜在住時代
　第二章 横浜鎖港談判使節団とともに渡仏
　第三章 逋債事件と興行師への転身
第 II 部 軽業見世物興行師時代（1867-81 年）
　第一章 ブレックマンとドラゴン一座
　第二章 タナカー・ブヒクロサンの誕生
　第三章 英国の軽業見世物事情とブヒクロサン
　第四章「ジャパン・エンターテインメント」へ
　第五章 ゴダユー一座こぼれ話―オーストラリアへの移住
第 III 部「ロンドン日本人村」仕掛け人時代（1883-94 年）
　第一章 日本の美術品および日本製品の流行
　第二章 ロンドン日本人村の開業―1885 年
　第三章 先行した二つの万国博覧会の影響
　第四章 ロンドン日本人村の経営と“住民”雇用事情
　第五章 ロンドン日本人村の焼失と再建
　第六章 ロンドン日本人村の残した影響
　第七章 軽業興行の変遷とブヒクロサンの最期
終章　日英博覧会余聞―1910 年

第 I 部ではブレックマンの日本での通訳者としての様子を通して、当時日本に在住した外国人たちの生活の一側面が明らかにされ、第 II 部では日本人の軽業師を引き連れてアメリカやイギリスで興行師となった彼が描かれている。そして第 III 部では本書の中心とも言えるロンドン日本人村の企画と運営、実際の興業の様子が明らかにされている。さらにこの博覧会がイギリスや他国へ及ぼした影響についての考察や同時期に上演され人気を博した演劇「ミカド」に関する記述は、当時の欧米諸国における日本人観の一端をよく表しており、大変興味深い。

19 世紀後半以降多くの日本人が渡航したハワイやアメリカ本土、また日本の勢力圏としての東アジアへの移住と比べると、イギリスへの日本人渡航は数の上では非常に少ない。しかしブヒクロサンのような外国人によって軽業師、大工、職人など様々な職種の日本人がイギリスに渡ったことは大変興味深いことであり、幕末から明治にかけての日英関係史のおける文化的社会的側面を知る上でも、本書は大変有意義であると言えるだろう。